



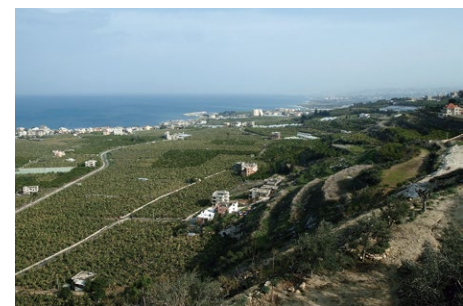
重層的な人物描写が描き出す、 秘められた苦悩の歴史

不寛容な多様性の国、レバノン

レバノンという国名を聞いて、具体的なイメージが浮かぶ日本人はそれほど多くはなからう。一九六〇年代から七〇年代の大学紛争を経験した世代ならば、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）と共闘した日本赤軍が潜伏していた国として記憶しているかもしれない。岐阜県ほどの面積しかないこの国は、起伏に富んだ豊かな美しい自然と、マイノリティを多く抱える宗教的多様性で、中東ではほかに類を見ない存在である。

ところが、多様性は必ずしも寛容性とは結びつかない。むしろ逆であることは、今日アメリカで蔓延する排外主義を見てもあきらかであろう。レバノンでも、国民の四割を占めるキリスト教徒の最大集団であり、政治的に優遇されているマロン派カトリックが、宗教的アイデンティティに基づく過激な排外的ナシヨナリズム、通称フェニキア主義を唱えてきた。その攻撃対象となってきたのが、一九四八年以降この国に流入してきた、パレスチナ難民である。両者の争いこそが、一九七五年から一五年間続いたレバノン内戦の発端であり、無国籍者として差別を受けるパレスチナ難民を蛇蝎のごとく嫌うマロン派は、いまだに多い。

「判決、ふたつの希望」は、マロン派の自動車修理工場経営者トニーと、非正規雇用の工事現場監督である



バナナ農園が眼下に広がる、レバノン南部の田園風景。トニーの故郷ダムール村も、このような村だったのだろう(2012年)

パレスチナ難民
ヤーセルを主人
公に、正義なき
歪んだレバノン
社会の今を法廷
劇という手法で
描いた作品であ
る。監督・脚本
のズィヤード・
ドゥエイリーは、
クエンティン・
タランティーンノ

の初期作品に撮影助手として参加しており、そこで学んだとおぼしき重層的な人物表現が、レバノンの歴史の暗部を描くうえでびたりとはまっている。

国を牛耳る社会的強者の傲慢なマロン派と、弱者であるパレスチナ難民の不公平な争い。二人の対立は、一見そう見られがちだ。しかしそんな日本のニュース解説番組が好みそうな皮相的な見方では、レバノン、ひいては中東で起きている事象は読み解けない。

言っただけなら侮辱のひとこと

トニーの家の違法建築をめぐり、トニーとヤーセル

は対立し、互いを侮辱する。フェニキア主義に傾倒し、相手がパレスチナ難民だと察して横柄に振る舞うトニーに対し、ヤーセルが発したひとは「ポン引き野郎」。もちろん面と向かって言うてはいけないことばだが、陰口を叩くときは頻用され、別にめずらしくもなんともない。ところがヤーセルに対し、トニーが発したひとは衝撃的だ。直訳すると、「お前の父親の系譜が、シャロンに根絶やしにされていればよかったのに」。シャロンとは一九八二年、マロン派極右軍事組織「レバノン軍団」と結託したイスラエル軍がレバノン内戦に介入し、パレスチナ難民キャンプでの虐殺を招いたときの国防相である。彼はのちにイスラエル首相となって、パレスチナとの和平と逆行する政策を強引に推進したことで知られる。これはヤーセル本人のみならず、その血族すべてに対する侮辱であり、逆上したヤーセルはトニーを殴打、告訴されてしまう。トニーの部下たちが一様に彼の肩をもち、気炎を揚げるいっぽうで、

身重の妻や父親がトニーの態度を厳しく非難する場面が印象的だ。マロン派信徒にもさまざまな見解があることがわかるのだが、ではなぜトニーはこれほどまでにパレスチナ難民に對して攻撃的なのか。

じつはトニーは、パレスチナ勢力から報復攻撃を受け、住民が虐殺されたベイルート郊外の村ダムールの出身である。父親とともにからも生き延びた体験は、彼のトラウマとなっていた。忘れてくとも忘れられぬ過去を、彼は自分からは決して口にしないのだが、トニーの正当性を強調したい弁護士によって、期せずして公判で暴露されてしまう。ダムール村の事件は闇に葬られ、レバノンでもほとんど忘れ去られてきた。フェニキア主義に熱狂していたトニーもまた、じつは国から見捨てられた存在であるという皮肉。しかもその現実を残酷に突きつけるのは、裕福で傲慢な、まさに社会的強者のマロン派の弁護士である。排外主義がもたらすのは、幾重にも渡る分断でしかないのである。

正義なき世界を救う人情

きわめて個人的であったトニーとヤーセルの争いは、公判が進むにつれて彼らの手を離れ、国中を巻き込んだナシヨナリズムの泥仕合を引き起こしてしまう。しかし外野で繰り広げられる争いをよそに、二人は仕事に真摯に向き合う職人気質を互いのなかに見だし、ひそかな共感をおぼえる。そしてあるとき、トニーはヤーセルに小さな厚意を見せる。この出来事を機に、トニーへの軽蔑と怒りを秘めていたヤーセルの態度にも変化があらわれ、トニーの鬱屈した感情を吐き出させるため、ある行動をとるに至るのだ。

正義なき世界を救うのは、結局のところ人の情、相手の境遇をわがこととして思いやる感情なのかもしれない。

菅瀬 晶子

民博 超域フィールド科学研究部

「判決、ふたつの希望」

原題： قضية رقم ٢٣

2017年/レバノン・フランス/アラビア語/113分/DVDあり

監督：ズィヤード・ドゥエイリー

出演：アーディル・カラム、カーメル・アル=バシャほか

2020年9月のみんぱく映画会にて上映しました。



トニーは同じマロン派の老練な辣腕弁護士、ワジュディーに弁護を依頼する。いっぽうヤーセルには人権派の若手女性弁護士がつくが、この二人の弁護士の関係性にもレバノン社会の今が投影されている
©2017 TESSALIT PRODUCTIONS_ROUGE INTERNATIONAL_EZEKIEL FILMS_SCOPE PICTURES_DOURI FILMS
PHOTO ©TESSALIT PRODUCTIONS_ROUGE INTERNATIONAL